

月

多田山公

月讀命は伊邪那岐命が祓禊の神事を行ぜられて右の目を洗はれた時におうまれになられた神で、日神とおならびになつて夜食國を治しめす天命を有せらるるのである。

夜食國と云ふのは日に対する月で、盈虧の義で、干満を知るところの潮と同じである。

生死遷流變転出沒を指示したので、宇宙は成住壞滅の物ではあるが、水と波との如く起伏すると云ふまで、固着凝結と見るのも実は人の身のはかなき迷ひである。

然れども、人は時間のうちに生き、空間のうちに動く。

生きつつ、動きつつ、心楽しく世を安らかに経過せんことを欲するので、相互に道德倫理を守らねばならぬものと規定す

るのである。

随つて因果応報をも教へ、諸惡莫作衆善奉行と勤むるのである。

けれども因果が無いのではない。

医者は病苦をうつたふるものに鎮痛剤とか麻睡薬とかの注射を為ることがある。

麻薬は病患を癒すのではない

が、患者はその薬のために苦痛を忘れることができる。苦痛を忘れて仕事を為て居るうちに、病氣もまた治つて健康体となることができる。

忘れるるといふことは実に不思議である。

人の身に睡眠の有るのを思へば、天国楽園とは夫かと考へらるるではありませんか。

月讀命 夜食國ヲ統治ス。

月夜見の矢は、よのをすくにをしらしめすなれば、つきやみ

のかみわざをとらせたまふともにも、つくゆみのかみかかりをさづけたまふのである。

其の「つきやみのかみわざ」とは因果応報の嚴則で「つくゆみのかみかかり」とは一超直入如来地の神通力無量力である。有にあらず無にあらず、有無の間にあらずして生滅起伏す。

ああひがてんじんゆうあい

因果無きにあらず。

応病施薬南無薬師如来。

因果有るにあらず。

唯此の衆生を愛して南無無量力吼如是天地を碎きて衆生を救出し給ふ。

如是天地白玉楼

破顔呱呱莞爾来

单身锦衣颺乎去

西東北南悠遊無辺。

心して我は行かなん朝夕に神の心を心とはして。

無宇宙～第一階層～第二階層は「一貫した」存在。

ツキヨミ (第一階層)

月詠 ツクユミ (ニ) ツクユミノカミカカリは、へ

ツキヤミ (三) ツキヤミノカミツザは、へ

無宇宙

神話

宇

宙

時空外領域

ヒノカミとしての

(本来の高天原)

カミ アノミナカヌシカミ
隠身 天之御中主神

(大宇宙の大中心)

(極)

アマテラスオホミカミの
ニギミタマ (和魂)

故人の
直日

↑ (第一魂)

神話上の高天原

第一階層

タマノカミとしての

アマテラスオホミカミ
天照大御神

(宇宙の中心)

神話上の
八百萬神

(この外郭)

(この外郭)

故人の
第二魂

↑ (喜身魂)

タマガキ玉垣

神話上の豊葦原瑞穂国

(地上世界)

第二階層

ミノカミとしての

スサノミコト
皇御孫彥命

(豊葦原瑞穂国の中心)

↑ (幸身魂)

故人の
第三魂

第三階層

サダビコノカミの導き

(および五十年祭までの)

(具体的な記憶や人格) 真身魂

故人の
霊念思考

第四階層

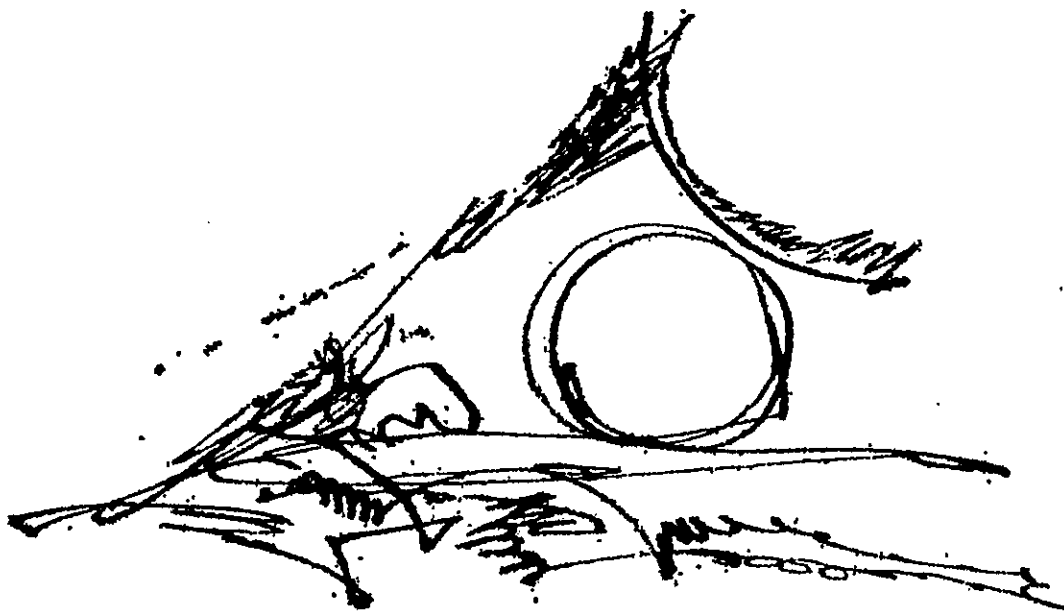
五十日齋までの ミタマ マツリ

素身魂

故人の
肉体身

図表：神の死と人の死

ヒ 零の神 (直日)	(直日)		ヒ (零の神と しての伝へ)	⇒ 櫛の雄柱 一つ火の 火神事
瑞垣			↑ 伊邪那美命の	
タマ 魂の神 奇身魂		タマ (魂の神と しての伝へ)	神避ります	⇒ 八種雷 の秘事
玉垣		↑ 天 若比古 の死		
ミ 身の神 幸身魂		猿田毘古神の導き		⇒ 高木神の 天返矢の 神事
中垣				
ミタマ 身魂の神 真身魂	人 間 的 ↑ 顕 身ツ 魂ミ			神カム 習ひ 習ふ
荒垣				↓
ヒト 人の神 (肉体身)	の 分 際			人間世界 の ミタママツリ



悉達多太子の悟證は、虚空藏菩薩の妙智であると云ふから、一圓光明の○であつて、人間身としては、唯一絶對と感ずる極樂淨土である。日本神道は、傳へて之を、高天原と稱へまつるので、天照皇大御神の統治したまふところである。固より、二柱御祖神の言依ざし給ふところフタハシラミオヤノカミで、兼ねて、夜食國と、海原とを統治し給ふことは、ヨノヲスクニ
ウナハラ

改めて説くまでもないのである。

その状態を假に圖示すれば如此である。

中心の圓相は、之和魂にして、天照皇大御神と稱へまつり、その下より升りて、時に、天照皇大御神をも凌ぎたまふは、荒身魂にして、建速須佐之男命と稱へまつり、下より下に一環連係するものは、月夜見・月ツキヤミ弓・月讀命と稱へて、眞身魂・幸身魂・奇身魂の神にてましますと共に、時に術魂と成りて、風波擾亂の慘劇を演ず。

秋風の、早くも訪へば、襖せし、

渾河のあたり、柳黄ばめり。

と、古老の嘆じたる、人間世界の實際である。

此のやうなわけで、

高天原たる極樂淨土は、一圓相で、神言靈であると共に、其の反對の面が存る。

否。

「月神事」と 幸 19 頁の用語

無宇宙	第一魂 (直日)	(数理では) 「五」①	ニギミタマ 和魂 ミタマ (御魂)	アラスミタマ 天照皇太神
ツガキ 瑞垣				
宇宙の 第一階層	第二魂 (霊)	②～	ウシミタマ 奇身魂	↑ 合わせて、 月夜見月る月読命 ツキヤミツクユミヤヨミノミコト
タマガキ 玉垣		合わせて、 「 霊念思考 」	ササミタマ 幸身魂	
宇宙の 第二階層	第三魂 (念)			
ナカガキ 中垣				
宇宙の 第三階層	思考		マミタマ 真身魂 (川面用語では) 「まがみたま」	
アラガキ 荒垣				
宇宙の 第四階層	身体 (肉体身)		アラミタマ 荒身魂	ツクハヤスサヲノミコト 建速須佐之男命

(神としては、御霊^{ミタマ}とも名めた概念)



金
体
神

と
も
の
ア
マ
ニ
タ
ス
オ
ホ
ミ
カ
ニ

一、ニギミタマ (人間で言えば、直日) ^{ミタマ} 御魂
あくまでも 延喜宮の側に留まる諸力
「天照皇太御神」 (境地としての側面を強調)

二、マミタマ・サ^キミタマ・ウシミタマ ⇒ ミタマシロへ
中間的な諸力 (活用としての側面を強調)
「月夜見・月孺・月讀命」 ^{ミタマ} 身魂

三、アラミタマ ⇒ 火葬。 ^{ミタマ} (身魂, 肉体身)
物理次元にまで降りて来る諸力
「建速須佐之男命」 (箇体としての側面を強調)

幸身魂

祭リ、以て第三、靈と念とを消散せ
しむるも、因より此の大神呪大明呪に
依る也。

彼は此の人なれば第一魂を送る時、即
此の魂を送るべき也。

然る後、思考と身体とは唯、此の
大神文中に死地消散了也。

日本民族が日本語としての神言靈を忘れ佛教が傳ふるところの阿彌陀佛音を唱ふるもののみ多きが如く基督教徒が正しき神言靈を傳へながら之れを奉唱することを知らずして反って禍津毘の禍言を唱へつつあるが如く各國各民族は相率ゐて分裂分散に走り下向轉落しつつあるは悲しむべく憂ふべきの甚しきものである。

たまたま言靈を云ふ者はあつても全音義の何たるかを忘れて居ること柿本人麿をはじめとして近時の言靈學者と稱するものの皆然るところで為に却つて甚しき謬見邪説を出して世を毒し人を苦しめて居る。

ふるべゆらと古典に載せたのは斯のような禍津毘の禍言を指したので之れは五音二言の禍言靈である。これに由良止袁布留込の七音を加へて布留邊由良

由良止袁布留邊の十二音三言と成す時は禍津毘調伏濟度救出の神音と化るので阿三忙銀備^ニ咩^ニ咩^ニ尾^ニ觀^ニ南^ニの音は禍言であつて阿三忙銀備^ニ咩^ニ咩^ニ尾^ニ觀^ニ南^ニ咩^ニ但羅^ニ咩^ニ吒^ニ悍^ニ漫^ニの音は佛言で禍津毘たる六種外道を調伏し濟度し救出するの祕言密語であるとの祕言靈で神直靈の神言である。

ふるべゆらゆらとをふるべ。
ぬなとももゆら。

浅間山人こそ仰げ眞賢木の綠色濃く照りにぞ照りたる。

資財を用ゐず材料無しに事業の成立つと云ふことはない。不正不美不善なるが如きも一切は命である天命である。之れを使用するは直日であり神直日であり直靈であり神直靈であり神日本磐余比古である。之れを阿知米阿知米於於於と教へられてある。

「^{エト}直日」も「^{カミナト}神直日」も（中略）

「アチメ、アチメ、オオオ」も、無宇宙の側の実在を指して
言う名称である。

そして、無宇宙の側の実在は、常に

宇宙の側にある存在を「資財」として使用する立場
にある。

人間においては、^{ナホヒ}直日が使用する側であり、

^{ミチメ}身頃^{ミチメ}は使用される側の存在である。

故に「^{ナホヒ}エト」としての主体は「^{ナホヒ}直日」であり、

それは故に、ここでは「直日」と書いて「エト」と読ませている。

此の詩は、正誠正義であれば正位正業を得て、山河大地も一圓光明体なることを実証し得らるるのであるとの意を詠んだので、正誠正義が「火」で「日」で「光」であることを教へて居る。

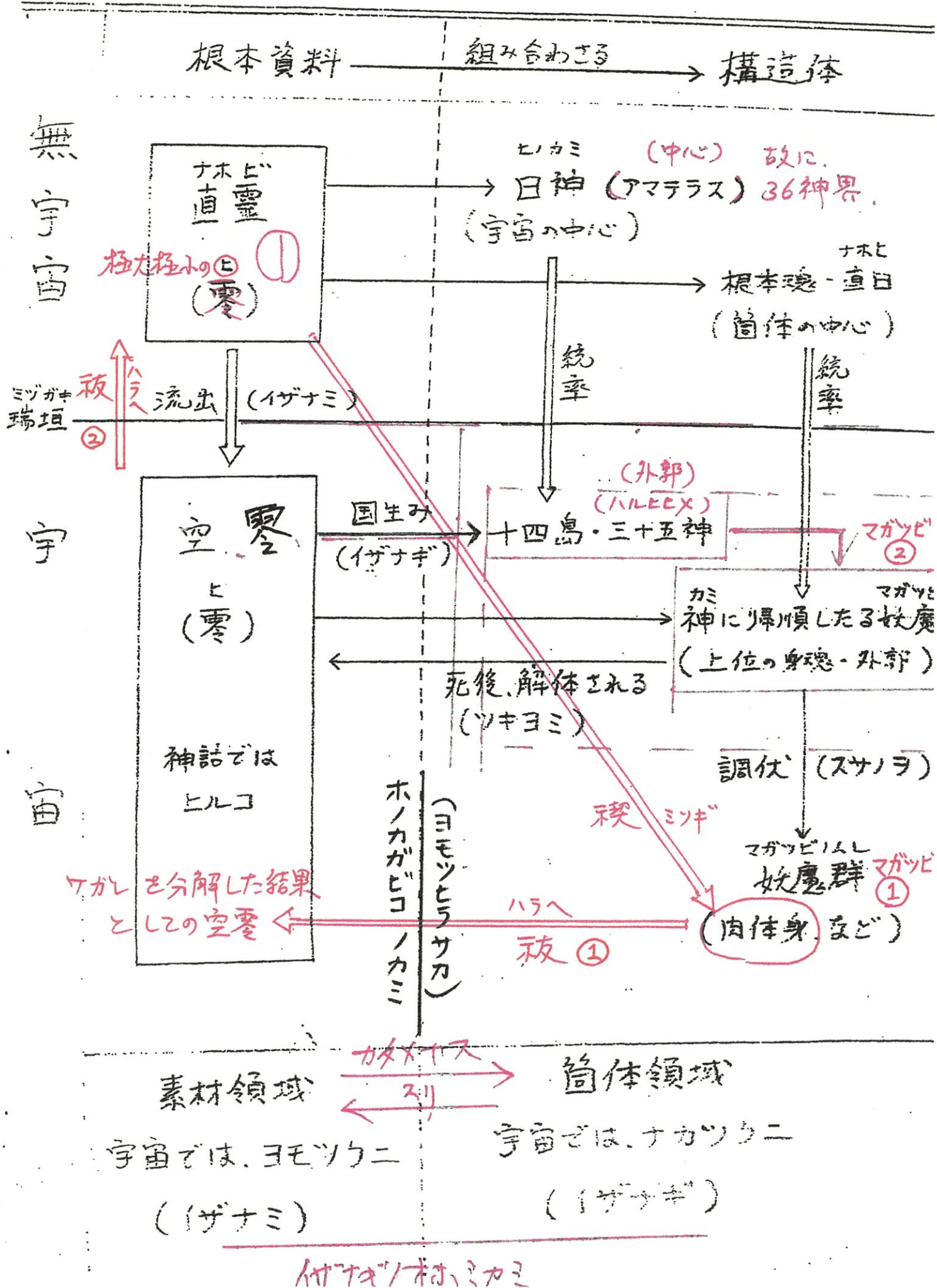
正誠正義にして神國を築くのが日神事で、之れを成さしむるは直霊の妙用である。直霊の妙用と云ふのは「ヒ」なる霊が、直日の統率のままに妖魔群団身と成り、妖魔軍として妖魔を調伏済度救出するの意で、妖魔なる禍津昆が直く正しく妙用を現する神と化り神の神業を以て太平嘉悦の楽土を築成するの義である。

神に帰順した福草霊の活用だ

と云ふに等しいので、大攝津日とも称へて、神ならざるの神である。古事記に「別天神」と記したのは、此の意味であつて神魔同凡に在るのである。

神と魔が同凡に在るのは神ではなくて神人であるから尊と称へて、独神とも隱身とも萌騰之物とも天神諸命とも神聖とも純男とも人とも独化之神とも俱生之神とも一神とも別神とも天祖とも祖神とも二柱神とも傳へたところの命（みこと）で天命（いのち）で大道（みち）であります。之れを祖神三示の大道と呼ぶことが出来る。

修理図式の機能図 直霊と空零



無宇宙の「^ヒ零」と宇宙の「^{くろい}空零」

／ まず「大宇宙」は「無宇宙」と「宇宙」とに分かれる。

即ち、「結ばれざるヒ」と「結ばれたるミ」である。

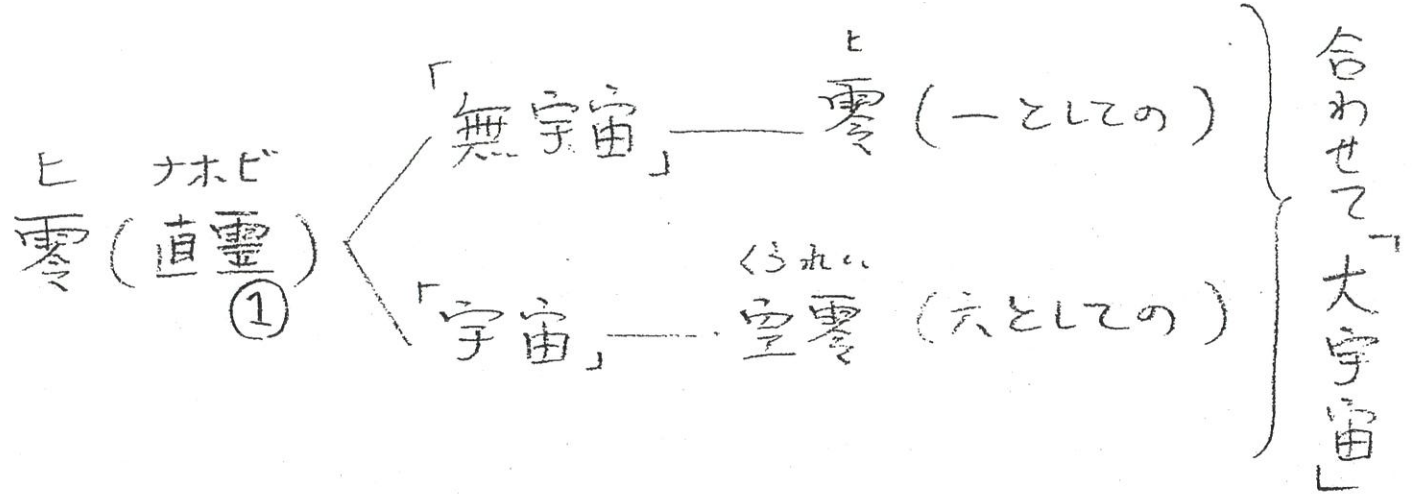
「宇宙（^{くに}園）」全体を、統一体としては「全宇宙」とも称する。

単に「宇宙」とだけ言った時には、しばしば、「全宇宙」の構成要素である個々の「^{かん}管体（小宇宙）」を意味している
ので、注意が必要である。

／ また、数理としては、「無宇宙」の側にある「^ヒ零」は
「^{いち}一としての零」であり、「宇宙（全宇宙）の側にある「^ヒ零」は
「^{ろく}六としての零」である。実体としては同じ「^ヒ零」なのだが、
「^{かん}管体（小宇宙、数理としては五）」が成立する以前の「^ヒ零」
が、その^{あと}後の「^ヒ零」かの^{ちが}違いである。

／ 前者は「^{かん}管体」の成立に際して「中心」となり得るが、
後者はもう「中心」とはなり得ない。他の「^{かん}管体」に
「外郭」として組み込まれるだけの存在であり、

「^{くろい}空零」と称される。



「宇宙」 統一体としては「全宇宙」
個々の「個体」を指しては「小宇宙」

- ナホビ
直靈 ① …… ヒの段階のナホビ、零そのもの
- 直靈 ② …… ビの段階のナホビ
結び止めたる靈、即ち魂、ツマノヲ
-

2020.2.18.(火)

NO.

DATE

ヨモツクニ
素材領域

ナカツクニ
箇体領域

ヨモツクニ
素材領域

無 (極大極小のた)

宇宙

宇宙

大被

より粗雑な部分は
そのまま火に焼かれ
ハラへの対象となる。

(尽天尽地のた)

直日

奇

幸

真

荒

同下

普通は省略してこ
表記するが、実際には、
A→Bの2段階

(A)

(B)

より精妙な部分は
組み直されて、
上のミツマへ。

瑞垣

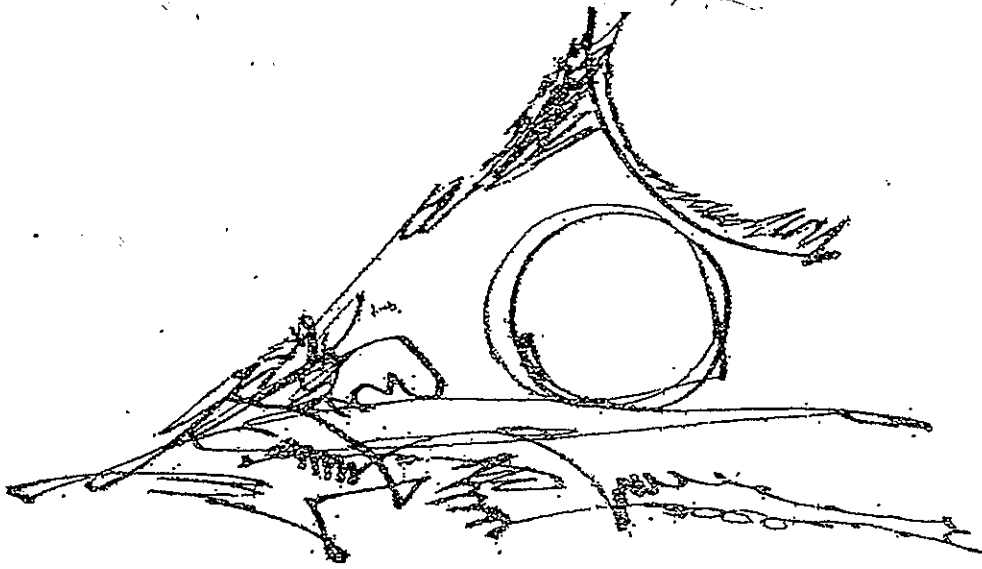
ナホビの妙用

(4/10)

主体	別天神、神ならざるの神、神魔同凡のカミ (別名、大福津日) オホマガツヒ
↓	
その作用	(実際には、多数ある作用力のうちの一つ) 直霊の妙用、マガツヒ (神に帰順した福津毘) の活用。 ナホビ マガツヒ
	ヒ 「零」なる霊
	ニギミタマ
第一段階	1. これが、直日 (中心) の統率のままに ～ と成る。 ↓ 妖魔群団身 (中心の統率に従っているのだから、 ウシミタマ サキミタマ これは「神に帰順したマガツビ」である。
第二段階	2. これが、妖魔軍として (妖魔のままに) ～ と調伏・清度救出する。 ↓ 他の妖魔 (まだ神に帰順していないマガツビ) マミタマ アラミタマ
→	こうした二段階の妙用によって、 太平嘉悦の楽土 (神国) が築成される。

「月神事」と幸19頁の用語

無宇宙	第一魂 (直日)	(教理では) 「五」①	ニギミタマ 和魂 ミタマ (御魂)	アマスミタマ 天照皇太御神
ミツガキ 瑞垣				
宇宙の 第一階層	第二魂 (霊)	④~	ウシミタマ 奇身魂	↑ 合わせて
タマガキ 玉垣		合わせて		
宇宙の 第二階層	第三魂 (念)	「 霊念思考 」	ササミタマ 幸身魂	ツキヤミ 月夜見 ツクエミ 月読命 ツキヨミ 月読命
ナカガキ 中垣				
宇宙の 第三階層	思考		マミタマ 真身魂 (川面用語では) 「まがみたま」	↓
アラガキ 荒垣				
宇宙の 第四階層	身体 (肉体身)		アラミタマ 荒身魂	タケハヤスサヲノミタマ 建速須佐之男命



悉達多太子の悟證は、虚空藏菩薩の妙智であると云ふから、一圓光明の◎であつて、人間身としては、唯一絶對と感ずる極樂淨土である。日本神道は、傳へて之を、高天原と稱へまつるので、天照皇大御神の統治したまふところである。固より、二柱御祖神の言依ざし給ふところ、兼ねて、夜食國と、海原とを統治し給ふことは、

改めて説くまでもないのである。

その状態を假に圖示すれば如此である。

中心の圓相は、之和魂にして、天照皇大御神と稱へまつり、その下より升りて、時に、天照皇大御神をも凌ぎたまふは、荒身魂にして、建速須佐之男命と稱へまつり、下より下に一環連係するものは、月夜見・月弓・月讀命と稱へて、眞身魂・幸身魂・奇身魂の神にてましますと共に、時に術魂と成りて、風波擾亂の慘劇を演ず。

秋風の、早くも訪へば、禊せし、

渾河のあたり、柳黄ばめり。

月夜見・奇身魂

と、古老の嘆じたる、人間世界の實際である。月弓・幸身魂

此のやうなわけで、

月夜見・眞身魂

高天原たる極樂淨土は、一圓相で、神言靈であると共に、其の反對の面が存る。

否。

天鳥船神事・祖霊祭 祖霊名書付紙用 神言霊

千早ぶる

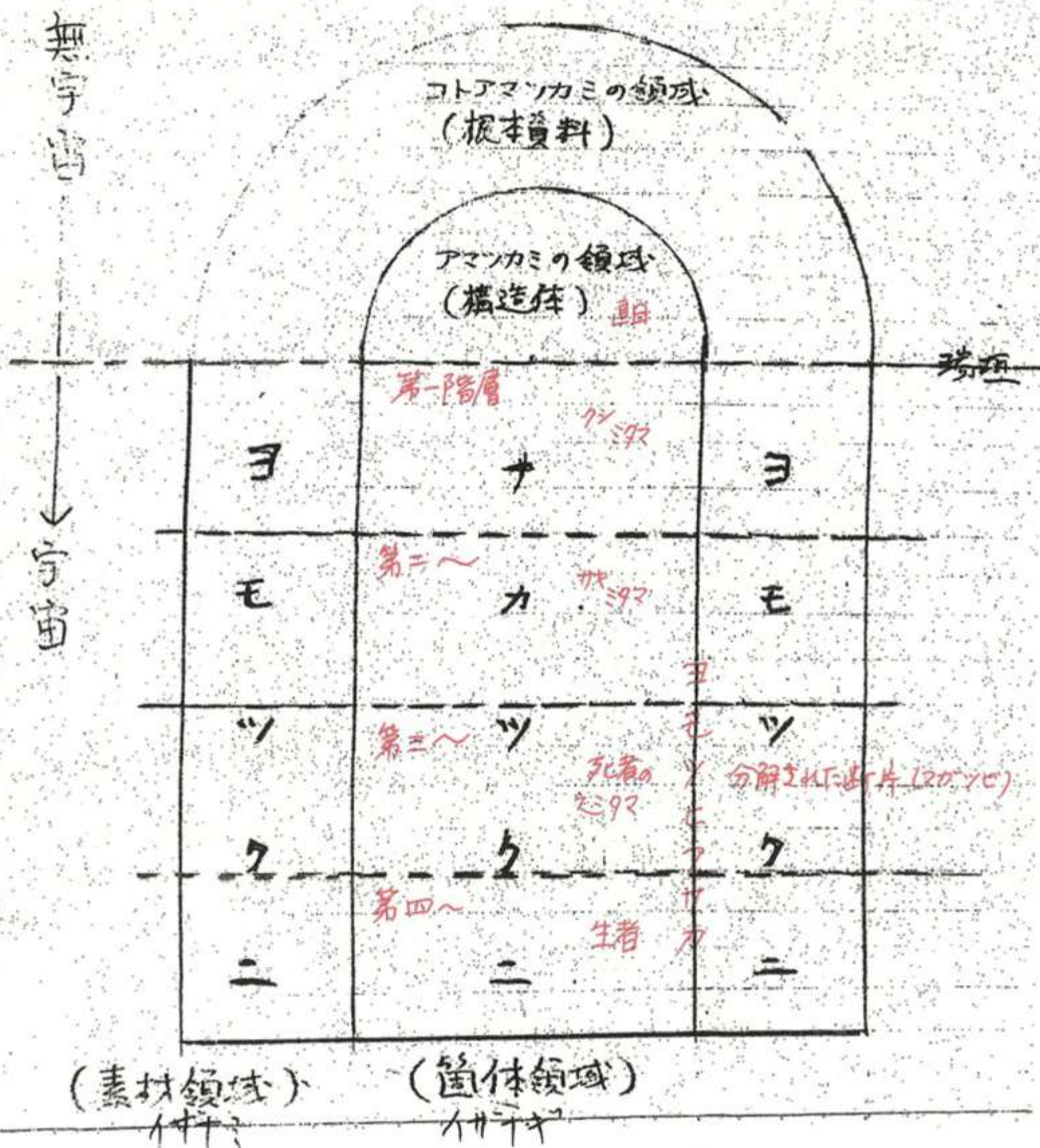
よきもあしきもおしなべて

高天原に帰るたましひ

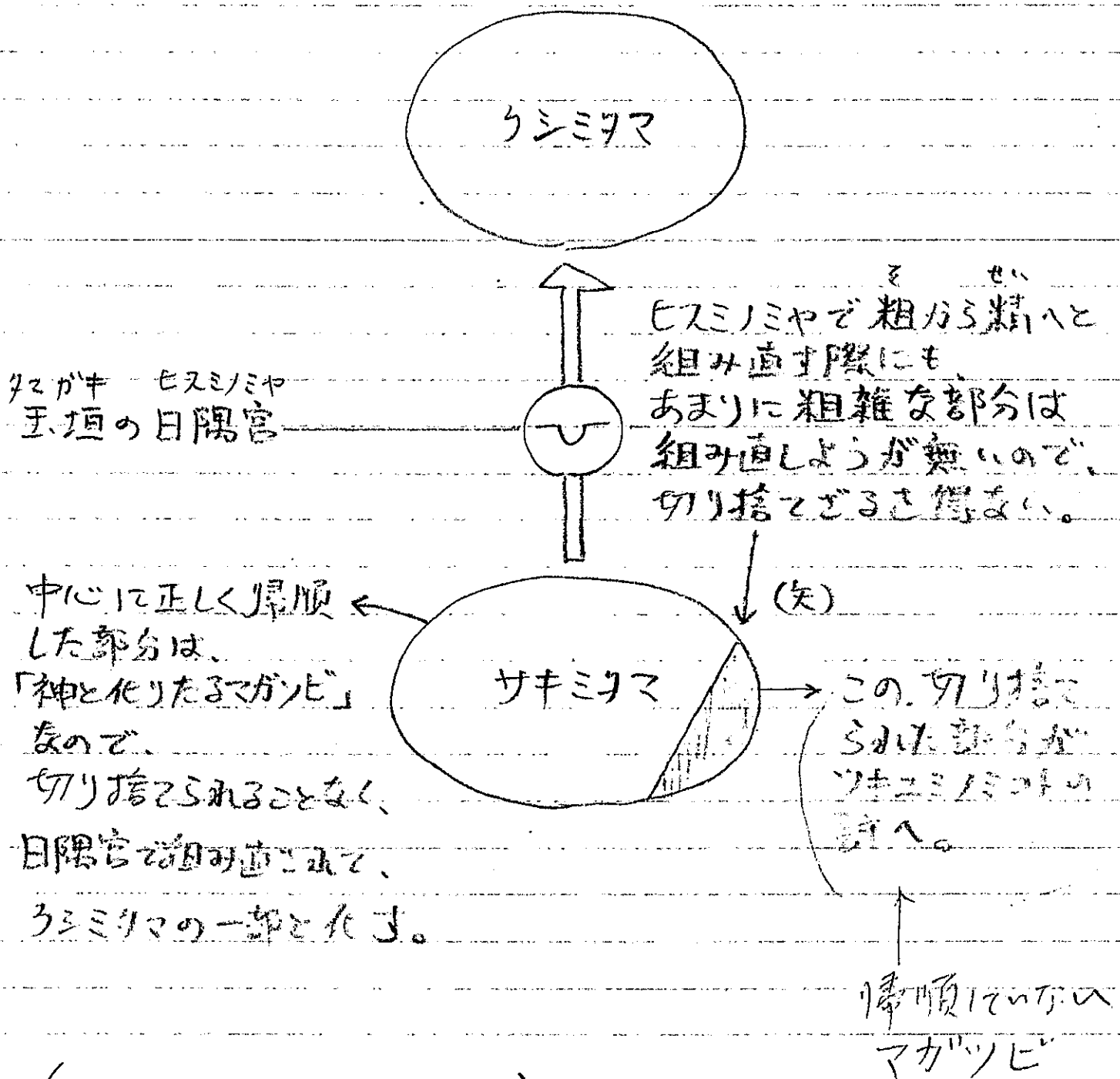
作法

- 一、目線より高くかかげて、下から上へ、フツ、フツ、フーと一息三吹
- 二、宣(笑(よし))と宣る。

「無_レ由」 と 「ナカツクニ / ヨモツクニ」 との関連



『死後、解体される』(ツキヨミ)の説明

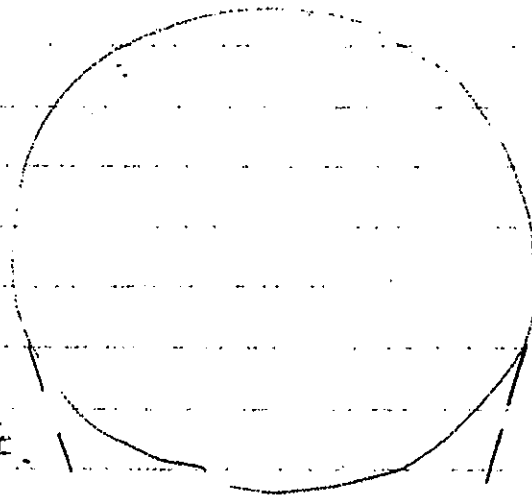


(2020.2.18.の図中。
「同下」の解説でもある。)

幸身魂
(第三魂)

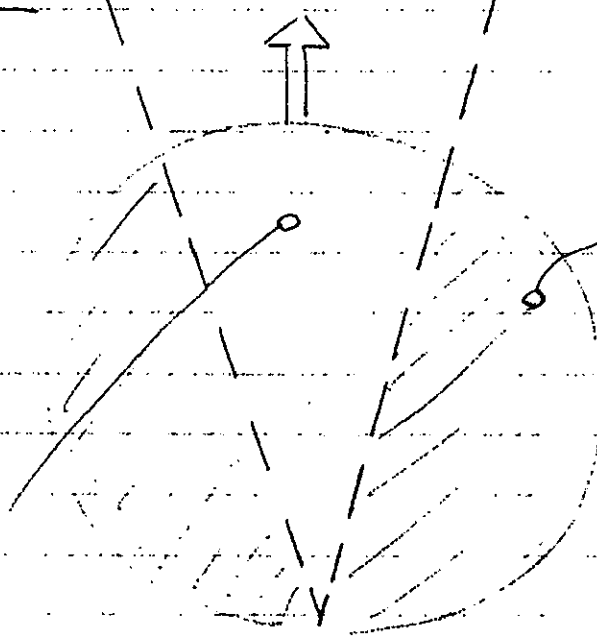
相対的に
永遠的存在

中垣



真身魂
(白魂)

滅ぶべき存在



(月夜見のカミワザ)

ワガシとして
削り落とされる
部分

→ ヨモツクニへ
送られて

何かの素材となる

(ソコドリミツマの
ソコドリミツマたる
やまの部分)

アワサウミツマとして残り

最終的にはヒスミミヤで組み直されて

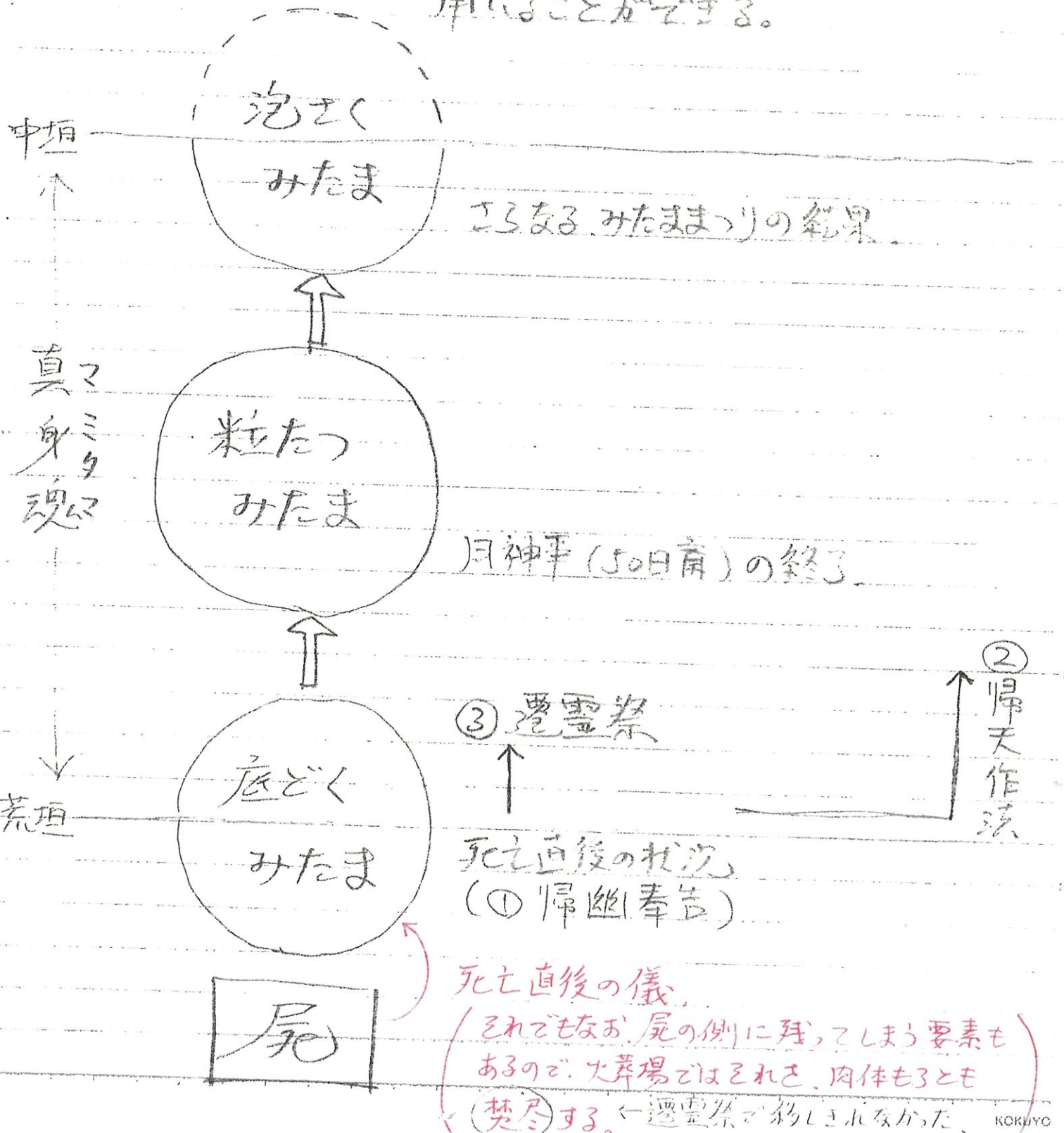
幸身魂の新たな一部分となる

(こちらを上へ導くのがサダビコノカミ)

本来、

「死者の境遇」を表わす用語なので

月神事によって「死者の境遇」そのものがより良くなってゆく過程の名称としても用いることができる。



れば、これをトヲカミと称へ十種神宝と讃仰したる饒速日尊にてましますなり」

と伝へて、十魂尊貴の身だと、神の国では白されるさうです。けれども、葦原中国では、天菩日アメノホヒとか天稚彦アメワカヒコとか天探女アマノサグメなどがががやがやと騒いで居るので、何と云ふか私は知りませぬ。

が、

人の身は何時何処で死なねばならぬかも図られぬので何時でも美しく死に得るやうにして居なければならぬ。

大君の稜威の身ぞと、我が名をば、清く守らな。御鏡掛けて。

さうして、生前には仮令、日隅宮を築き得ずとも、その死に際しては、必、日少宮に帰るべく、日隅宮を築かねばならぬ。

第三節 完

第四節

まことに、人の身は何時何処で何のやうにして死なねばならぬかも図られぬ。

それ故、何時でも我が身魂を神の宮と成すことの出来るやうに鍊成して置かねばならぬ。

近頃、世間流行の詞に「鍊成」と云ふのは、人材を有用に造り上げるものらしいが、それも究極は、満足に死ぬことの出来るやうにすることではなければならぬ。

「満足に死ぬ」と云ふのは、死に臨んで他人から葬礼祭儀の助けを借ること無く、自分自身で自己の身魂を完全に齎ることである。

ある。假令、人は之を祀ることを知らずとも、神は必之を記して祀らしめ給ふのである。

此のやうな境涯を、

ささの葉の、さやさやとして、鈿女子が、舞ひする小袖、手火に映えたる。

と、第一節に記して置きましたのは、人間的に歌へば、

吹く風に、ささの葉ずれの、おもしろく、小鳥の歌を、誘ふべらなる。

(タイ)

ものでありますから、此の歌を借りて、説明の一助と致しませう。

第十五節

不完全な人の身が、完全な「神」に成りたいと冀ふ。そこに祭祀が起るのだと、さきに白しましたが、その、人間世界の正しき祭祀は、「故人を齋る」ことから出發して、神人を産出するに到るのである。

吹く風の、風の隨。笹の葉の、さやさやとこそ、幸は寄るなれ。

此の世は、人間身心試練の道場で、神を仰ぎては、向上また向上して神界にも入り得るし、神に背いては、鳥獸虫魚にも劣る行爲を、耻辱とも思はぬやうに墮落して、地界魔境にも彷徨ふのである。

ところが、その墮獄の人も、獄裡の苦汁に驚いては、覺えず識らず、神を呼ぶ。それは、神の國の楽しさを忘れて居る身でも、その身の根本中心を成すところの魂は、斷えずその身に警告しつつ、本來の樂土に歸らせよう

とするからである。

「故人」と、一言に白しても、その生前の言論行爲等の様様である如く、死後の境涯も千態萬様である。その千態萬様の境涯に在るものを齎るには、それぞれに相應して、千態萬様の説示引導を必要とすべきことも、また固よりであらう。

ところが、世上の葬儀祭典を見るに、殆んど、千篇一律とか、年年様に依つて葫蘆を畫くとかの類である。それで、果して完全に濟度救出し得るであらうか。

何如に生を變へたと云つても、此の身も此の心も、生前よりの連續であるからには、ノリト、經文、聖書等の意味が俄に解つて、神界淨土天國等に往生し得るやうな都合にはなるまい。好都合どころではなく、多くの人は、「死ぬ苦しみ」と云ふ程で、生前には好く判つて居た事までも、判らなく成るとすら思はねばなるまい。

が、亦、此の生を變へると云ふやうな、人としての極度の變化に際しては、生前凡愚の身でも、忽然として、心耳が澄み、神眼が開け、神界に入り易くなつて、他から聞かされずとも、教へられずとも、自分自身に、神音を聞き、神象を拜し、神界を築き得べきでもあるとも想はれる。

けれども、此の世の事實を見るに、窮極に到れば、轉換すると共に、困厄の爲には、墮落しがちなものもある。此の世の實際が然る如く、前の世も、後の世も、天界も地底も、また必然るべき筈である。何ぜならば、宇宙の眞理は一貫して變らぬのだから、事實もまた必その通りであると知らねばならぬ。

野の小草、一つ眺めて、我は生けり。

天地、日月、此ここに宿れば。

狹隘なる牆壁の中に居て見れば、此の如きは、推測に過ぎないが、その牆壁は、我と我が身に造つたものであるから、何時でも取り去ることが出来る。その曉には、それ其の通りの事理である。

そこで、また、元に還つて觀ますと、**三世一貫の信仰に住して、迷ひ惑ふことの無い人は、一定様式の葬儀祭典で事足るのであり、そのやうな信仰が無く、懷疑惑亂の徒は、何如程善根を積まれようと、大事業を爲て居ようと、高位高官であらうと、それ等には少しも關はること無く、亡魂幽靈と化つて、夜となく、また、晝となく、獄卒の笞に哭き號ぶのである。それ故に、之を濟度し救出するには、妖魔斬殺の寶劍が無ければならず、鬼畜膺徴の鐵槌を持たねばならぬ。此の寶劍と此の鐵槌と、之を持つて、調伏し濟度し、救出し誘導して、神界樂土に入らしむるのである。**

之を言ふことは容易であるが、之を行ふには、その道に據らねばならぬ。その道とは、齋庭の祕事で、

第一に、死者の靈と魂との過去を明瞭に察知^シらねばならぬ。

第二には、死者の境涯に相應して、魔界にも神域にも、自由自在に出入することが出来ねばならぬ。

第三には、何如なる妖類魔族にも優る神智を具へねばならぬ。

以上の三つが必要なことは、改めて言ふまでもないことで、若しも之無ければ、何^ドう何處^{ドコ}へ送るべきかも分らず、盲滅法で、他を救濟するどころではなく、何時何處で、自分が仆されるかも知れぬ。

世間の醫者は、多くの場合、藥劑を用ゐて、病者に接するのであるが、それでさへも、その病魔から常に襲はれて、悩み苦しみ、禍を子孫にまで遺すものである。醫と成るならば、神醫と成らねばならぬ。葬儀祭典を司るならば、神の人と成らねばならぬ。神は一切を統べ給ふが故に、神の人をば、神の完きが如く完からしむるので

ある。

斯のやうに察て來ると、「故人を齋る」には、先決問題として、神の人と成るべきことである。と云ふと、また或は、甚難事でもあるかの如く思はれそうだが、實は誰でも、爲ようとすれば出来ることである。例へば、父母妻子の死に際會したやうな場合、人の常として極度に緊張するから、我としての直日の人と成ることが容易である。

我としての直日と云ふのは、八十萬魂がそのまま凝結して、全個體一團の火と化るので、之を、古典は、「櫛の雄柱一つ火」の祕言として傳へてある。「伊邪那美命のお崩れなされた時に、伊邪那岐命が、湯津津間櫛の男柱一つ取り闕きて、一つ火を燭して、御覽になれますと、宇士多加禮斗呂呂岐て、八雷神に成つて居られた」と記して居るが、比咩神御崩御の大事にお會ひなされても、五官的にだけでは、なほ未不徹底な爲に、神魔同凡の「一つ火」を燭して、はじめて、その實相を明らかに得たのである。人としてならば、全身心が、神の火と成つたので、本來本有の眞の相を顯し來つたので、其の原に歸つたので、或は、終に反つたとも云ふので、「鏡の船」を造り成したので、此に、「黄泉比良坂」の一線を劃して、妖魔調伏の祕儀を行じ得るに到つたのである。先にも繰返して述べたやうに、支那人の傳へた「喪」の字が、此の意味をよく教へて居る。喪とは、十口口一以の合成で、中央の一線が、顯界神域と幽界魔境とを分つもので、此の境界は、線無きの線で、「メ」と呼ぶのである。即、繼ぎ目、合せ目、變り目、別れ目、代り目、などと用ゐる目である。

此の目は、陰の「メ」であり、陽の「メ」であり、左であり、右であり、左右を合せたる目であり、母であり、子であり、母と子と、子と母とを合せたる「メ」である。母としては女で凹で、孔で穴で、左目で、「ヒダ

リ」であり、子としては芽で凸で、右目で、「ミギリ」である。

古典に、八雷神と傳へたのは、子としての「メ」で、豫母都志許賣と呼ぶ。黄泉津大神と傳へたのは、母としての「メ」で、亦等しく豫母都志許賣にいたします。別れては、母と子であるが、共に「メ」である。

此の「メ」と、彼の「メ」との偶ひては別れ、別れてはまた偶ふ。過去の過去際より、未來の未來際に彌りて、止む時無く、息む時無く、運り行くのである。

古老教へて云はく、

くすしかも、あやしきかもな。あめつちの、ありのことごと。ものみなは、ここにむすびて、そこにとけ、そこにとけては、またむすぶ。そこにわかれて、ここにあひ。ここにあひては、またわかる。わかれつ、あひつ。とけつ、むすびつ。ゆきつ、かへりつ。まがたまの、いほつみすまる。くしみたま、くすしかしこし。さきみたま、さきくまさきく。やさかにの、ふゆをこそませ。かくりよの、さちをこそませ。なきひとの、みたまみし。いまみしかみ。たまほこもちて、いまぞきませる。たましひもちて、いにますみたま。いうをえあ。

と。

その「ミタマ」は、「都夫多都御魂」であり、「阿和佐久御魂」であり、「底度久御魂」であり、猿田毘古神の御魂である。

「猿田毘古神の御魂」の神傳が存るので、私どもは、死者を齋るに、「水」を以つてすることを知り得たのである。天の「ミヅ」と地の「ミヅ」とを合せて、「麗はしき壯夫」を造り成す道を悟り得たのである。「大穴牟遲神

ミイツ 循環図

同じ「ミツ」を、陽としては「火」と称し、陰としては「氷」と称する。

無宇宙

宇宙

ノホルモを
「火」と称する。

ノダルモを
「氷」と称する。

(素戔のひつ)

トヨノミモヒを
奉る。

この循環に上り
乗るための作法。

人間

アマノマナサの
ミモヒを汲み。

(ヨモツウニ)

(ナカツウニ)

(ヨモツウニ)

(幸.136)

ミンスビノカミ

次に三産霊神

無宇宙

ミヅ、経テとしては綾威
緯ヨとしては水ミヅが
場所

(地)

ノ
ボル
モ
ノウ
ダ
ル
モ
ノ

(水)

(地^へのミヅ)
から(天^へのミヅ)
からあくまで
旧約聖書の用語

宇宙

ミヅ は コトマ であり、霊的な実体の名称だが、
ここで言う「火」や「水」はただの呼称である。

ノボルモノ 「本質的に昇り続けるモノ」という意味ではなく

循環するミヅの^上昇局面を指して

「今は上昇しているところのミヅ」の意味。

ウダルモノ 上記と同様

ミツマ

⑦

ミツマ
御霊

⑦

ミツマ
御魂

⑦

(直日)

ミツマ
身魂

コトアマツカミ

アマツカミ

クニツカミ

カミ
魂の神
5音1語

カミ
身の神
4音1語

カミ
身魂の神
3音1語

ヒ

ヒ
カミ

ヒ
零の作用

ミヅ

別れ

解け

往き

合ひ

結び

返り

ミヅカギ

ミヅとヒ
循環

(幸. 205)

が、石に焼かれて死給ひし時に、神産巢日命が、蚌貝比賣に、伎佐宜焦させ、蛤貝比賣に、水を持ちて、それを合せ作らせたところが、立派な男に成られた」とあるのは、その一例だが、「古典」とは、本來、此の事理の傳へで、「修理固め成すなる天沼矛」と稱へまつるのである。

そこで、また、前に返つて、「故人を齋る」のであるが、それには、第一に、その故人が、死に臨んで、何如なる態度想念を取られたかを知ること。

第二には、臨終の相貌。

第三、遺族縁類の故人に對する心情。

第四、臨終の季節と時刻。

第五、天候。

此の五つは、齋主の必知らねばならぬことである。之に依つて、その「ミタマ」が、猿田毘古神の何如なる御尋きを受くるかを知ることが出来るので、底度久御魂か、都夫多都御魂か、或は、阿和佐久御魂か、それぞれに相應して、調伏濟度救出誘導の詞と作法とを採るのである。その時に相應し、その處に相應して、その御魂を教に誘導せねばならぬ。

直日は、本來の神であるから、死と共に肉體身とは別れる。それは何如なる人も例外は無い。次ぎには、意識・思念等の所謂心であるが、之は、その人の信仰何如に依つて、直日と俱に神界に入るものと、各界に分散するものとが別れる。奇魂・幸魂・眞魂・和魂・荒魂・術魂・直毘魂・等と呼びなす各々の御魂は、その人の存在するが故にそれ等各々の御魂であるのであるから、人の死と同時に分離するのが常道である。それで、御魂齋のノリ

トは、

「ユクヒトノ、ココロシレバ、カニカクニ、トクカヘリマセ、イツカシガモト」と教へて、人の死と同時に、その根本魂たる直日は、人間身統率の任務を終りて、その本の神位カミクラに歸り往くから、第二魂以下の御魂は、速に別離して、「身魂城」に移り止まるやうにと、その御魂を伊都伎祭るのである。重ねて白しますと、いかなる御魂をも、一度は必、常道に引き入れてから、それを更に聚めて、國津神と伊都伎祭り、産土神と成らしめ給ふのが、故人奉齋の筋道である。

その常道を踏み過つて居る變態のものには、亡魂幽霊と呼ばれて、諸魂の一、或は、二、三、等が、そのまま結んで、幽界の生活を繼續することが有る。また或は、戰場に散る勇士が、明津神の稜威と成り得た時には、肉體以外のその人の諸魂は、完全に統一して、明津神の衛兵と成る。と云ふやうに、死後の生活は、生前に於けると等しく、或は、それに幾倍して、複雑多様である。と云ふばかりでなく、茲に、特に留意せねばならぬことが有る。それは、人間生活中に、自己統率の薄弱なるものは、念念行行、諸魂の分裂分散を制御することが出来ぬから、遊離墮落して、その人の生前既に己に獄裡の苦汁を啜る術魂と成るのである。

そのやうに、各界に分裂分散して居る魂は、その人の死に際會しても必しもそれを知るものではない。それ等は既に通信機關を失ひ、連絡が絶えてしまつたと云ふ状態なのであるから、知りやうが無いのである。或は亦、それを知ることが有つても、その身より分れたのだなどと云ふことは全く知らぬのである。

或は説を爲すものが有つて、「靈の世界」は、人間世界の如き不便な狹隘なものではない。何如なる境涯にも連絡の絶ゆるやうなことは無い。などと云ふ。

身

成る程、勸善懲惡の方便としては、何時までも連絡持續が必要かも知れぬ。原因結果は、未來永劫に彌⁷⁹らねばならぬかも知れぬ。

然しながら、人間の使用する算盤でも、加減乗除が、一本調子に行くのは、初等科だけである。直線が、何處までも直線として取扱はれるのも、幾何圖法の初歩に過ぎない。三十年許前のことでせうか、金子雪齋と云ふ憂國の士が、「現代の日本は、何う弾いて見ても、算盤に合はない」と、嘆聲を漏して居るが、同氏をして、今日に在らしめたならば、その算盤珠を改めて置き直すか、何うか。誰が見ても算盤珠に合はないことは、今も或は、然うかも知れぬ。

けれども、高等數學は、少し様子が別である。

一超直入。

一圓無際。

一音普遍。

一點極大。

とも云ひ、

大小を絶する時。

曲直を忘るる時。

美醜を知らざる時。

善惡に拘はらざる時。

と云ふ魔言もある。けれども、

有るものの無くなると云ふわけは無い。

既に有るとすれば、それに相應した結果を否定することは出来ぬ。ところが、不思議にも、算盤に合はぬ計算が有り、人間の知らぬ彗星が有る。

彗星火神、時有つて人間に生れ。劫火を掲げて、終焉を教ふ。

罔象水神、或は來つて人間に在り。

火中に坐して、初發を示す。

火と水とを合せて麗はしき壯夫を造ることは、神産巢日命の教ふところで、

死者を祭りて、神界を築き、故人を招ぎて、國土を經營する祕事である。

此の祕事が、葬儀祭典を主る人の行事で、地界魔境に行くべき原因を作つて居る死者をも救出して、神界樂土に入らしむるもので、常人に語るべからざる邪法であるから、祕事だと云ふのである。

一念稱名極樂往生の念佛敎の如きが、此の祕事を、そのまま露骨に運用して、日本國體にまで禍を及ぼさんとしつつある一例である。

祕事は、祕事なるが故に、衆人には説示すること無く、ひとり、齋庭の火人が執り行ふべきである。然うして、此の祕事が行ぜらるる時、

はじめて、齋事が生きて來る。噫。然しながら此の祕儀密言。語るべからず。知らしむべからず。然り。而して、敎へざるべからず。救はざるべからず。噫。もし、此の祕事が無いならば、惡人は遂に救はれず。鰥寡孤

獨は、希望の繋ぎやうが無い。

云はく、汝は怠惰なるが故に貧しいのだ。前生の行爲が悪いから熾獨の嘆きが有るのだ。何も彼も、因果應報である。苦しいのが厭ならば、勤め勵み、骨身を粉にして働け。假令、今生には報いられずとも、來生は、必、富者と成り、貴人と生れ、終生樂しみが盡きぬであらう。と、

それならば、「故人の齋」も、その生前の行爲を動かすことは出来ぬから、故人を救ふものは、故人以外に無い。と云ふことになる。

此のやうな教へ。

壯者は、それでもまだ可い。働く力を持つて居るから、何とか發憤して、希望をも持ち得るであらう。けれども、老病衰弱の貧人は、何といふ悲しいことであらう。憐れむべきものであらう。遂に、泣き號びつつ、暗黒の土に歸るの外はあるまい。

が、それもそれが、宇宙の事理であるならば、また何う爲ようもあるまい。けれども、もし、過れる教へを以つて、如斯他を苦しめ悩ますとしたならば、その罪は何如ばかりであらう。と、また一方に、

教への根本義は正しくとも、聞き誤つて、とんだ横路に入り、遂には、路も無い斷崖に立往生をする一向宗徒のやうなものもある。

道を教ふるは難く、之を學ぶのも容易でない。祕事は語るべからずと雖、婆心猶止み難きものが有り、重ねて云ふ。若も、惡人はその惡を辨償し盡してから、善人に變り、邪曲は、その邪曲を贖ひ終りて、漸く正直に化し、はじめて救はれるとするならば、それは、神力でも佛智でもない。常人の俗念で、何の難有いことも尊いこ

ともない。悪人も猶且救はれ、愚者もそのまま助かるので、此處に初めて、神威の赫赫たるを仰ぐのである。

そこで、祖神は、唯此の神言靈を稱へまつれよと教へたまふ。神言靈は、それがすなはち、「カミ」にてましますから、一と言一と言と、出るだけそのまま、出すだけそのまま、神の身として、神の國を築き成すので、一言の葛城主の言離の、禍言も一言の、善言も一言の、祕神挂りであります。

専念一意、神言靈を稱へて疑ひを起すこと無く、惑ひ迷ふことが無ければ、念念皆是神で、言言又是神で、行即神で、天地は、此に統一魂神と成る。

神言靈を稱へまつる人は、そのまま神で、之に和するものは、また皆神で、之を聞きて喜ばざるものは禍津毘で、或は害心を生ずるものは、大禍津毘である。

その言は神で、その光りは神でも、その境に應じ、その時に依り、千態萬様の變化をまぬかれぬ。邪曲醜惡のものに逢へば、それを撃攘摧破せねばならぬから、禍津日神と化して、神直毘神・大直毘神・伊豆能賣神の妙用を發揮するのである。古典に、「八十禍津日神・大禍津日神の二柱は、黄泉魔境ヨミクニの垢と穢とに因つて成りませる神である。」と傳へてあるのは、單に、その垢と穢とが禍津日だと云ふのではなく、穢き繁國に到られたから、それに應じて變化した伊邪那岐神で、「その禍を直さんとして成りませる。神直毘神・大直毘神・伊豆能賣神」とは、また固より、その三神としての伊邪那岐神で、「三柱の綿津見神」も、「墨江の三前大神」も、「三貴子」も、同じく伊邪那岐大御神にてましますこと、また勿論である。此のことは、

天鳥船神の神儀行事が、明瞭に教ふるから斷言するのである。

(323 頁 7 行目他)

(323 頁)

隠身カクリミの神
純男ヲノカギリ神聖カミ
天祖アメノミオヤ
天津神アマツカミ

(327 頁後半)

天照大御神の
天河原アマノカハラ

宮(やど) → 宮ミヤ
代り目 → 秘ヒメ
通い道 → 天浮橋
アマノウキハシ

我と導くもの

須佐之男大神の
須賀宮スガノミヤ

大国主神が
天詔琴アメノノリゴトを
かきなし給ふ処

我の我とは

雲立つ
二雲の国の秘宮ヒメミヤ



「零の神」

生
み
成
す

第一階層

(魂の神としての国土)

「魂の神」

生
み
成
す

玉垣

第二階層

(身の神としての国土)

「身の神」

生
み
成
す

中垣

第三階層

(身魂の神としての国土)

「身魂の神」

生
み
成
す

荒垣

第四階層

(人の国)

(326 頁末)

「人の神」 = 「完成された日止」
奇身魂
直日

(注) 零の神の多くは必要に応じて 身魂をまとい、宇宙に降りて魂の神としても活動するので、同じ神名でも区別を要す

(326 頁末 ~ 327 頁初)

無宇宙

1 次第次第に
精より粗に転化

2 単純より複雑に
組み直される

第四階層

人間身においては、

直日 (本来の神)

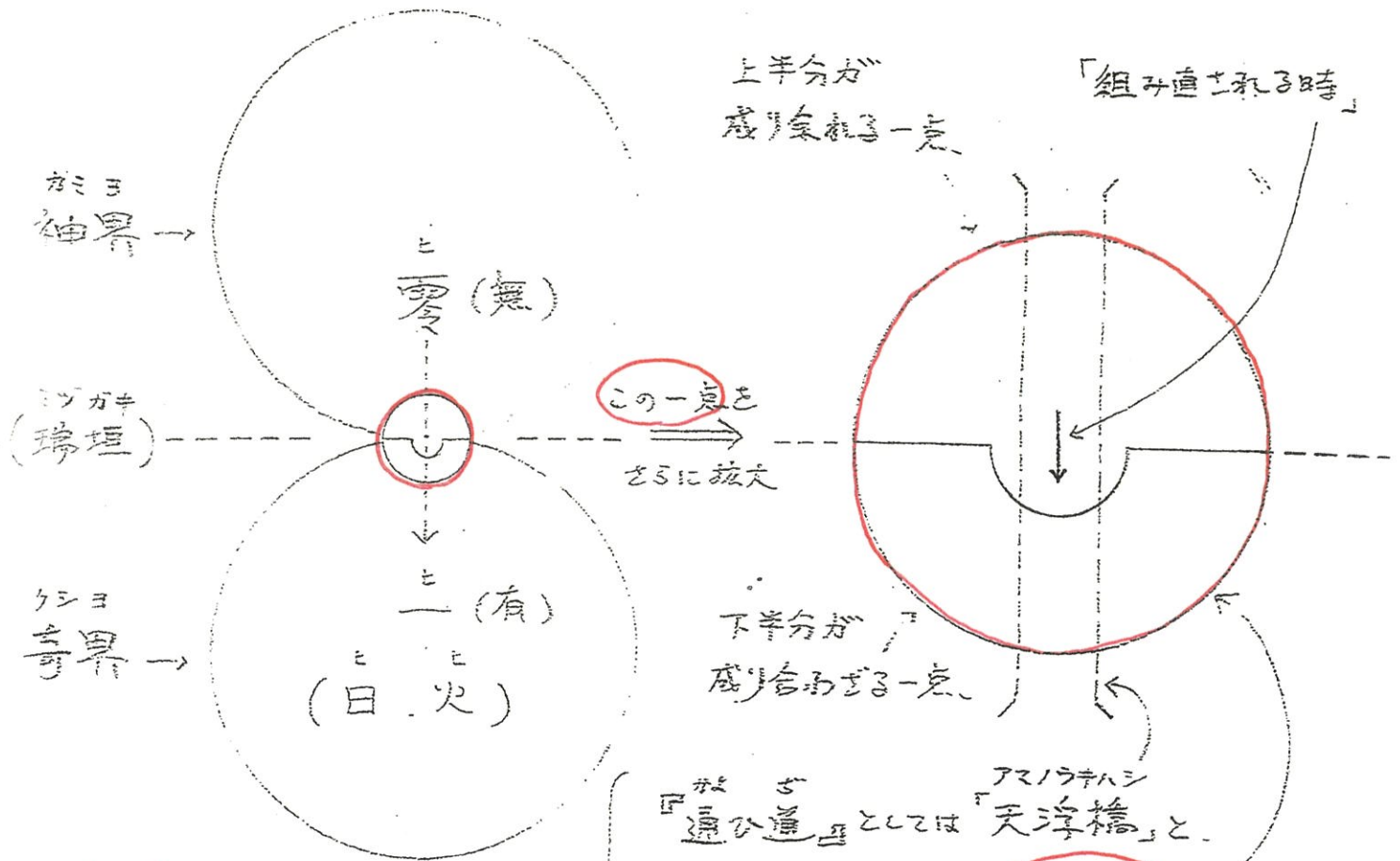
サキタマ・ウシタマ (神に帰順した子マカツビ) → マカツビ

マカツビ②

アラタマ・マタマ (まだ充分には神に帰順
してないマカツビ) マカツビ①

表23 『接触面たる一点』即ち『国を主みえす零』の拡大図 (10)

(76頁. 92頁. 参照)



実際には、「この一点」は
無宇宙であり、モノは
無宇宙においてこそ
組み直されるのである。

『^{カミ}通^ミ道』としては「^{アスノウキハシ}天浮橋」と。
『^{ヤト}胎』全体としては「^{ヒスミノミヤ}日隈宮」と。
中核部分は「^ヒ終」という。

合本104頁より。

この文脈では、同じ「一」でも、無から生じたばかりの存在であることに力点を置く時には「火」の字を使い、やがてまた無に帰する存在であることに力点を置く時には「日」の字を用いている。

同じ漢字を使っているが、「中心(日)+外部(火)=全体(日)」とする時の「火」や「日」とは、やや意味が異なっているので、注意を要する。

ファイル(三)
(9~10頁. 参照)

2020.2.18.(火)

NO.

DATE

ヨモツクニ
素材領域

ナカツクニ
箇体領域

ヨモツクニ
素材領域

無^ヒ (極大極小のた)

宇宙

宇宙

大
被

直日

奇

幸

真

荒

瑞垣

同下

普通は省略してこう
表記するが、実際には、
A→Bの2段階

②

より粗雑な部分は <
そのまま火に焼かれ
ハラへの対象となる。

①

より精妙な部分は
組み直されて、
上のミクマへ。

(尽天尽地のた)

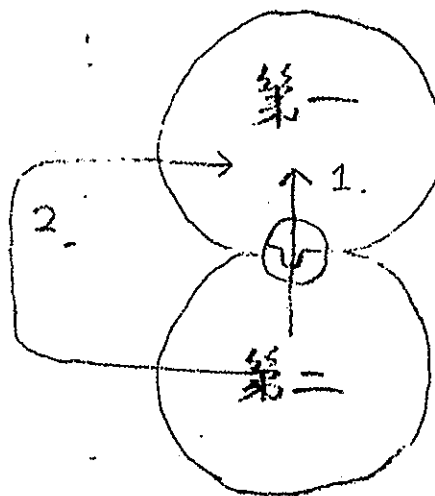
2019.10.15 (火)

階層間をト下する際^{ヒスミノミヤ}は、日隈で「組ッ直される」訳だが
 この言は、或る意味では「無宇宙」である。

無宇宙 < > 宇宙

これと全く
 同様の
 考え方にて

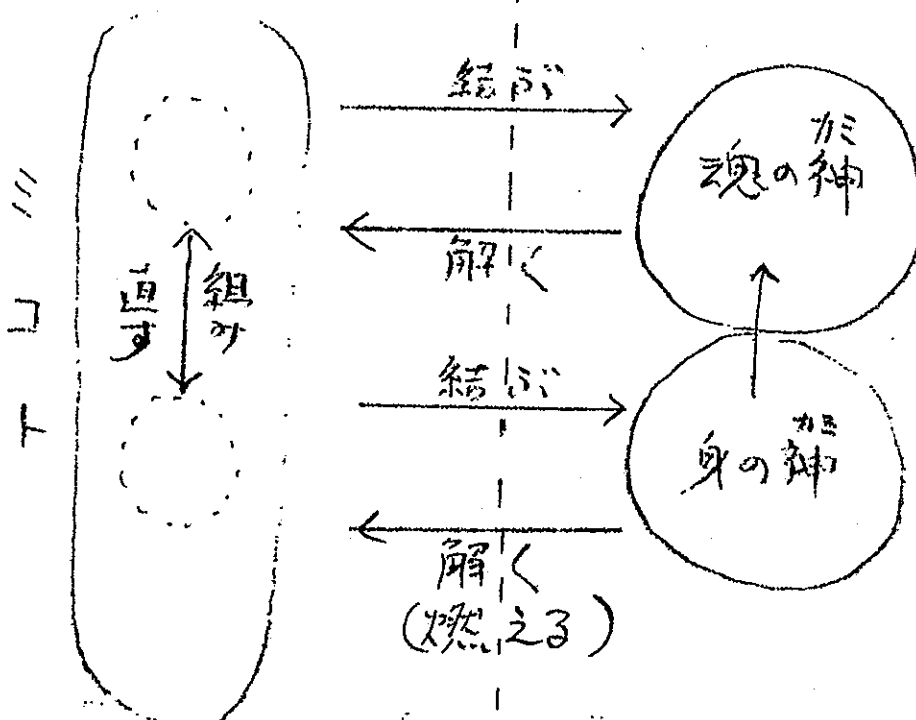
組み直す



1. 普通は
 言わねて守結に
 こう考へているが、

2. 実際には
 無宇宙も経由して
 組ッ直されている。

ヨモツクニ ← → ナカツクニ



直霊と空零

根本資料

組み合わせる

→ 構造体

(フレ)

ナホヒ
直霊
(零)

ヒカミ

→ 日神 (アマテラス)
(宇宙の中心)

→ 根本魂 (宇宙の中心)
ナホヒ
直霊

流出 (イザナミ)

統率

統率

状況・状態を表現する言葉

国生み (イザナギ) → 十四島・三十五神

空零
(零)

カミ
神に帰順したる妖魔
マガツビ

死後、解体される (ツキヨミ)

神話では
ニルコ

(上位の身魂・外部)

クシミタマ
サキミタマ

調伏 (スサノヲ)

マガツビ
妖魔群

(肉体身など)

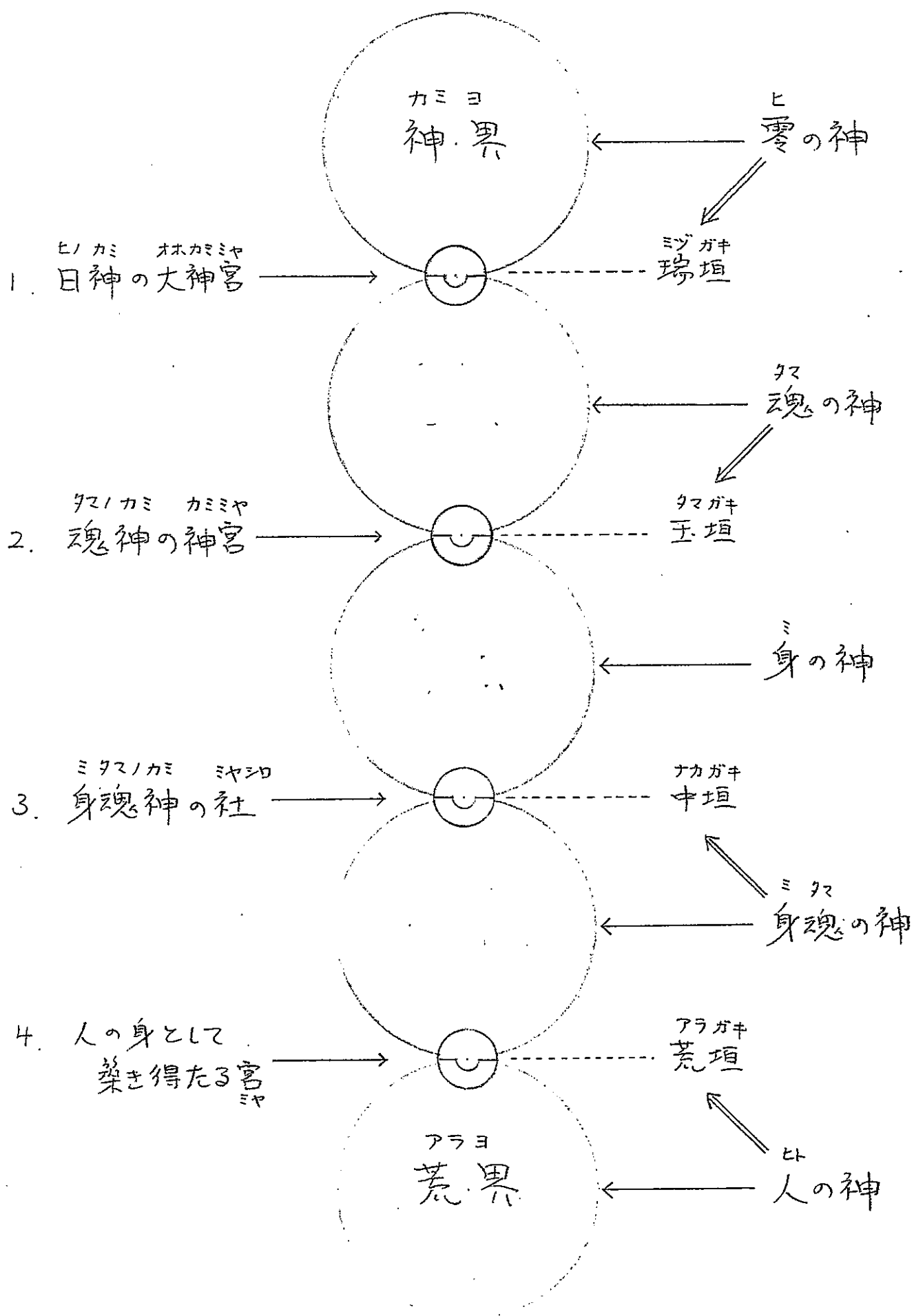
カタマタス

素材領域

→ 構造体領域

宇宙では、ヨモツクニ
(イザナミ)

宇宙では、ナカツクニ
(イザナギ)



(神界)

ミヅガキ
瑞垣の上

1.

ヒノカミ オホカミヤ
日神の大神宮

アマテラスオホミカミ
天照大御神の
アマノカハラ
天河原

(い)

タマガキ
玉垣の上

2.

タマノカミ カミミヤ
魂神の神宮

スサノヲノオホカミ
須佐男大神の
スガノミヤ
須賀宮

(い)

ナカガキ
中垣の上

3.

ミタマノカミ ミヤシロ
身魂神の社

オホウニミカミ
大國主神の
アメノリゴト カミ
天詔琴を画き鳴し
給ふ処

(い)

アラガキ
荒垣の上

4.

ヒト ミヤ
人の身として築き得たる宮

八雲立つ
イツモノクニ ヒメミヤ
出雲国の秘宮

(荒界)

ヒ/カミ カミヲ
火神の神徳

アマテラスオホミカミ
天照皇大神

ヒ/カミ カミミヤ
火神の神宮

アマテラスオホミカミ
天照皇大神

(神界)

ミヅガキ
瑞垣の上

ヒ/カミ オホカミミヤ
日神の大神宮

アマテラスオホミカミ
天照大神の
アノカハラ
天汚原

()

タマガキ
玉垣の上

2.

タノカミ カミミヤ
魂神の神宮

スサノヲノオホカミ
須佐之男大神の

スガノミヤ
須賀宮

()

ナカガキ
中垣の上

3.

ミタノカミ ミヤシロ
身魂神の社

オホニニミカミ
大國主神の
アマノコトカミ
天詔琴を画を鳴し
給ふ処

()

アラガキ
荒垣の上

4.

ヒト ミヤ
人の身として榮を得たる宮

八雲立つ
イソノクニ ヒメミヤ
八雲国の秘宮

(荒界)

穗耳命としても、いづれも共に、新しき国土を生み成し給はんと御準備遊ばさるる時なので、零の神が魂の神としての国土を生み成す時、魂の神が身の神としての国土を生み成す時、身の神が身魂の神としての国土を生み成す時、また、身魂の神が人の国を生み成し給ふ時、等と、次第次第に、精より粗に、清陽より重濁にと転化し、或は、単純より複雑に、簡素より繁多にと組み直さるる時、その代り目、それを〔秘〕と呼び、その胎を〔宮〕と称へ、その通ひ路を〔天浮橋〕と仰ぐのである。

之に由つて、先に載せた「美斗能麻具波比神言靈」の教ふところは、㊦であり、㊧であり、日であり、さして、伊邪那岐命伊邪那美命二柱祖命であることが知られる。則ち天地と呼び、神魔と称する経緯の存在が、産靈産靈成り成る事実を指示したので、やがて、それが、伊邪那岐神の神界と、伊邪那美神の魔境とで、㊦と㊧とすべきことを悟らるるのである。人間的に云へば、それは、善悪であり、正邪であり、美醜で、曲直で、即、神魔である。然しながら、神代の「カミ」は、然うは云はずして「ウ」なりと教へ給ふ。

●よしあしの隔てもあらで、かみながら、唯往き返る波の音かも。

此のやうに称へて、「ウト」と教へ、「ウトノミヤ」の秘言なりと知らしめ給ふ。

しもつづら、くるやくるやに、河船の、もそろもそろに、曳き来縫はせる。

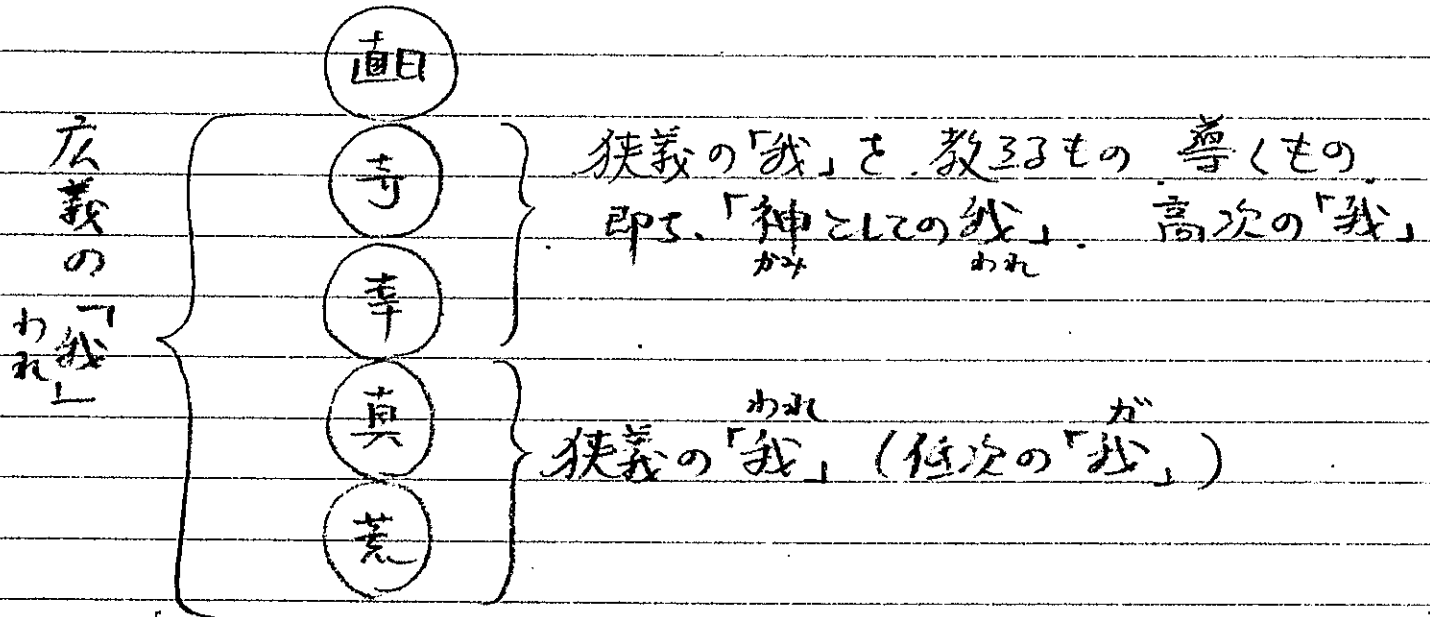
ああ。

結びては解け、解けては、また結ぶ。

神魔剖割、人天往返。如是生。如是滅。如如去来。

今日、今時、仰ぎては見る。十字架上死生解脱の主。伏しては聴く。根之国底之国妖類魔族の叫喚。

高次の「我」と低次の「我」



「神としての我」 正確には、ウニツカミとしての我、であり

「カミと化りたるマガツビ」としての我

個人の人間の「神としての我」もまた、ウニツカミの一員であり、

その神徳^{カミナリ}と神名としては、大國主、などと呼ぶ。

(神話の大國主神、にちなんで)

帰還
(死)